
古代アメリカ学会会報

第35号



コスタリカ、グアヤボ国立遺跡公園、出土石彫

©植村まどか

目次

◆会員からの寄稿	1	◆第18回研究大会報告	12
◆国際シンポジウムの報告	9	◆事務局からのおしらせ	22
◆フォーラム情報	10	◆編集後記	24
◆第2回西日本部会研究懇談会の報告	11		

2014年1月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます

「第5回中米考古学大会」参加録

市川 彰（日本学術振興会特別研究員 PD/国立民族学博物館外来研究員）

2013年11月26日から29日にかけて「第5回中米考古学大会」がエルサルバドル国立人類学博物館で開催された。2005年に第1回が開催され、二年に一度開催される同大会も早5回目を迎えた。本大会は「自然災害とひとの活動：ホヤ・デ・セレン遺跡、世界遺産登録20周年記念」と題し、コロラド大学P・シーツ氏の基調講演をはじめ、研究発表55本、パネル・ディスカッション3本があった。私が知る限りではエルサルバドル、グアテマラ、メキシコ、ニカラグア、コスタリカ、ホンジュラス、米国、日本からの参加者があった。

研究発表数は前回の71本を下回ったが、発表内容自体は調査速報をはじめパブリック考古学、歴史考古学、産業考古学、化学分析、岩刻画、自然災害といったように多様化するエルサルバドル考古学の状況が垣間見えた。また、内容も濃いものばかりであった。ニカラグアをはじめ、ホンジュラス、コスタリカといった国々の最新調査成果を聞くことができる点はメキシコやグアテマラでおこなわれる国際学会とは異なる本大会の特徴といえる。

本大会で最も充実していたのは3本のパネル・ディスカッションである。2日目の「ホヤ・デ・セレン：調査・保存・管理」では、シーツ氏やエルサルバドル文化庁職員に加えて、一般参加者からの質疑も交えて、議論がおこなわれた。やや政治的な議論も含み迷走しかけたが、土製建造物に関する修復・保存の技術的な問題点や解決策については明確になった点もあり、今後は具体的実践にうつせるかどうか、そしてそれらが継続的におこなわれるかどうかを鍵を握っているように思う。

筆者も加わった3日目の「エルサルバドル西部ジャガー石頭像の伝統：図像・コンテキスト・意味」では、これまで展開されてきたようなジャガーか否かという単調な議論ではなく、F・パレデス氏による文化的政治的アイデンティティ論、伊藤伸幸氏による考古学的コンテキストに基づいた新たな解釈、L・ヘンダーソン氏によるメソアメリカレベルでの世界観との関係性など今後新たな

展開が予感されるような議論がみられた。筆者は、ジャガー石頭像に酷似する小型土製品の存在とそのコンテキストからジャガー石頭信仰がエリート層だけではなく非エリート層にも浸透していた可能性について指摘した（写真1）。

4日目の「火山活動と人間活動」ではR・ダル氏による2時間近い熱のこもったイロパング火山噴火の年代とそのインパクトに関する発表に加えて、柴田潮音氏による考古学調査からみるイロパング火山噴火新年代（535年）に関する矛盾点、エルサルバドルの生物学・植物学からみた年輪年代法の問題点が指摘された。ダル氏自身も考古学調査成果との矛盾点には気付いているようであった。今後は、自然科学的手法に基づく結果や世界各地の事例とのすりあわせだけではなく、火山灰と遺跡の関係がより直接的に理解できるエルサルバドル国内の考古学調査成果とのすりあわせも同時におこなっていく必要があるだろう。その意味においては、考古学の側からも積極的に成果の公表を今後はおこなっていかなければならないと強く感じたパネル・ディスカッションであった。

このようにエルサルバドルでおこなわれる中米考古学大会がもつ特徴や存在感は回を重ねるごとに鮮明となってきているように思う。第6回が開催予定の2015年は第55回アメリカニスタ国際会議がエルサルバドルで開催される年でもある。定期的に中米考古学大会に参加できそうにない方にはぜひ参加をお勧めしたい。エルサルバドルあるいはホンジュラス、ニカラグア、コスタリカといった国々の考古学研究の新たな潮流を感じる良い機会となるかもしれない。



写真1 筆者が参加したパネル・ディスカッションの様子

—中間領域特集—

前回の特集「フィールド調査体験記」に続き、本号も特集を組むことになりました。今回は古代アメリカにおける2つの中核地域（メソアメリカとアンデス）に挟まれた中間領域を研究する本学会員による寄稿文です。近年、政治的・経済的に安定を取戻しつつある本対象地域では調査が活発化し、研究は新たな局面を迎えています。具体的な調査研究報告に関しては本学会誌などをご参照いただくことにし、会報では中間領域ならではの問題関心や調査にまつわるこぼれ話を綴っていただきました。中核地帯を結ぶ単なる橋梁地帯としてではなく、独自の性格を持つ多様な世界として再定義されつつある中間領域の新たな一面に触れてみてください。

●ニカラグア・マタガルパ県マティグアスにおける地域研究の開始—考古学と博物館学による地域課題解決にむけて—

南 博史（京都外国語大学）

はじめに

京都外国語大学（以下、京外大）では国際文化資料館（以降、資料館）を中心として、中米メソアメリカ地域での学術調査が行われてきた。これは故大井邦明名誉教授¹の京外大での20年を越える研究成果そのものともいえる。

それは1991年～93年のグアテマラ・カミナルフユ遺跡の考古学調査にはじまり、1996年～2000年のエルサルバドル・チャルチュアパ遺跡の総合学術調査に継続された。その成果について触れる紙面の余裕はないが、プロジェクトのメンバーが今もエルサルバドルでの文化財行政や考古学調査に携わっている²ことは、もっとも評価されていいことであろう。

大井先生亡き後、京外大で再び中米学術調査への機運が本格的に始まるきっかけは、昨年2012年6月に開催された大学創立65周年記念国際シンポジウム「ラテンアメリカ統合への挑戦」（主催：京外大京都ラテンアメリカ研究所、ラテンアメリカ・カリブ諸国大使会議）である。「ラテンアメリカ・カリブ海諸国の統合は、何世紀にもわたる支配の後、独立した国家として勃興した諸国民にとって、歴史、文化、宗教、地理、社会・政治的状况に共通性があることから、古くからの願いであった。」³として、ラテンアメリカ・カリブ諸国と深いつながりがある京外大が当該地域における歴史、文化、社会を対象とした研究を積極的に進めることが求められた。

京都ラテンアメリカ研究所では、これをうけて「アメリカ地中海地域文化研究会」を立ち上げた。

この研究会は、中米六か国とカリブ海および周辺諸国を包含する新しい地域概念「アメリカ地中海地域」を初期文明形成期から現代に続くひとつの文化圏としてとらえ、地域内の同質性と異質性が現在この地域に多くの国々が存在することと何らかの関連があるという仮説をたて、考古学、歴史学、社会学からそれを実証的方法で解明するという目的を掲げている。

一方、資料館においても京外大と現地との友好交流関係を背景⁴に、エルサルバドル、ニカラグア、コスタリカなど中米地域における新しい考古学・博物館プロジェクトに向けて予備調査を始めていた。これは筆者が研究テーマとする「考古学と博物館を仲介者とする実践的地域研究」、また「フィールドミュージアムづくりによる地域再生」を目指した調査活動でもあった。

そして、「アメリカ地中海地域文化研究会」の研究活動の開始にともない、資料館がその一端も担う使命を持って、2013年の今年、ニカラグアおよびコスタリカにて考古学および博物館に関する調査を本格的に開始した。

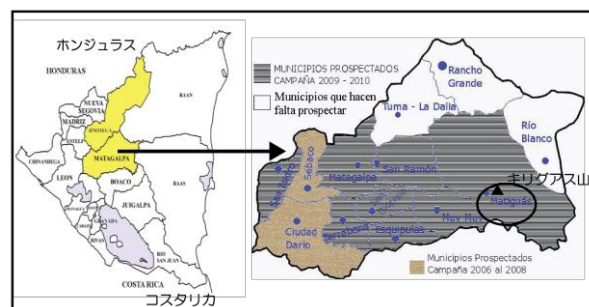


図1 ニカラグアおよびマタガルパ県内地区図⁵

マティグアスでの調査に向けて

資料館があらたなフィールドに選んだのは、ニカラグア北部マタガルパ（Matagalpa）県マティグアス（Matiguás）郡のキリグアス山とその周辺、

とくに南西側に位置するティエラブランカ (Tierra Blanca) 地区を中心とする地域である (図 1)。

2012年3月ニカラグアでの最初の調査は、全く手探りの状態だった。研究仲間である名古屋大学助教の伊藤伸幸さんから紹介をうけたニカラグア国立自治大学 (以下、UNAN) のサグラリオ先生 (Sagrario Balladares) からの情報提供でニカラグア北部エステリ周辺、オメテペ島周辺が候補にあがった。また、ニカラグアで調査を実施する場合は、ニカラグア文化庁、大学、博物館のどれかと共同調査を行うことになるという。UNANでは北部マタガルパ県にフィールドがあり、博物館となるとグラナダにある mi museo が実績⁶を持っているということがわかった。

第1候補地としてコスタリカ、ニコヤ地方との関連を含め太平洋側からオメテペ島周辺で調査、第2候補地としては、エルサルバドル、ホンジュラスからつながるニカラグア北部山地、つまりメソアメリカ文化圏と中間領域の接触地域である。

そして、2012年8月、第2候補地域のニカラグア北部マタガルパ県マティグアス郡のティエラブランカ地区ラスベガス遺跡を訪問した。この現地調査は2つの目的があった。

一つは、マタガルパ県で遺跡分布調査を行ったサグラリオ先生の案内で現地を確認することであり、もう一つは UNAN と共同して活動しているマタガルパに所在する NGO の ANIDES (ニカラグア開発支援協会) 代表のグロリアさん (Gloria Elena Ordoñez Vargas) との意見交換である。事前の話によれば、ANIDES はマティグアスにおいて先住民文化の正しい理解を通じた地域活性化を目指した活動を計画中であり、将来博物館を作りたいということであった。

結果は、UNAN の考古学調査と ANIDES が計画している地域活動「マタガルパ市ティエラブランカ共同体の歴史保護プログラム」は、考古学と博物館学を仲介者とする地域研究として協働できるものであり、資料館が新しい調査を行うのにふさわしいと判断し、マティグアス郡ティエラブランカ地区を中心とした地域を研究対象とした。

プロジェクト・マティグアスの開始

2013年8月下旬から9月にかけて、発掘

調査候補地であるティエラブランカ地区ラスベガス遺跡 (Finca Las Vegas) の測量調査、表面踏査および周辺の遺跡確認を目的とした最初の現地調査 (プロジェクト・マティグアス) を行った。時間的・費用的な課題もあり、またニカラグア文化庁への調査申請についての課題もあったが、今回はラスベガス遺跡の表面踏査、遺物採集・分析、キリグアス山腹の遺跡確認を実施できた。

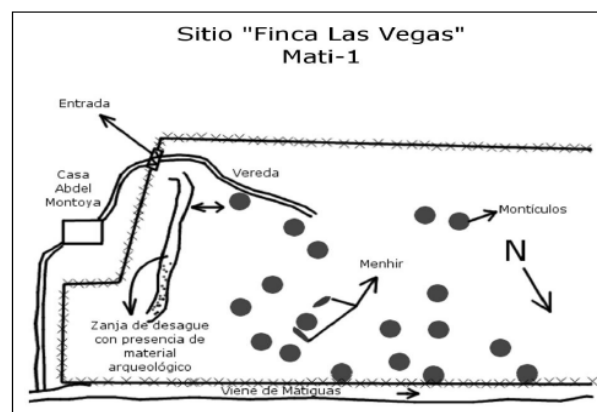


図2 ラスベガス遺跡略図

あわせてプロジェクト・マティグアスの開始については、地元行政機関であるマティグアス郡の首長の許可だけでなく、住民議員による意思決定会においても大方の賛同が得られたことが大変ありがたかった。サグラリオ先生のこれまでの考古学調査成果の報告、グロリア代表からの ANIDES のプログラム紹介に加えて、京都外国語大学大学院博士課程1年の植村まどかさんが、議員さんの前で堂々とプロジェクト・マティグアスの意義や目的、そして私たちの熱意を伝えてくれたのである。



写真1 遺跡を歩く植村さんと同志社大学小川雅洋くん

来季に向けて

プロジェクト・マティグアスのスタートはわずか10日足らずであったが、UNAN、ANIDES、地域行政機関、地主・地域住民方々の協力もあって順調に終えることができた。一方、課題も明確になってきた。

この地域は北部山地からカリブ海側への出口に位置するとされ、UNANによる表面調査は行われているものの発掘調査は皆無であり、当然土器編年も十分ではないし、両地域を比較するような研究はない。来季に予定している発掘調査の最初の目的だろう。

また、マティグアス郡長や ANIDES は、フィールドミュージアムによる地域活性化という主旨・目的について強い関心を示しており、ティエラブランカ以外の地区へ説明することを希望している。ティエラブランカにおいて、コミュニティミュージアムづくりと合わせたモデルを作って提案する予定である。

調査地周辺は自然公園に含まれており、とくにキリグアス山周辺は昔から人々の生活の中心であっただろうことは容易に推測できた。しかし、農園・牧草地などによる環境破壊が進んでいる。先住民文化を明らかにしていくことは、ひいては自然環境と調和のとれた持続可能な開発にもつながると考えている。考古学と博物館学を仲介者とした地域研究には総合的な視野が必要であることをあらためて認識した調査でもあった。

註)

¹ 2009年1月21日逝去。享年65歳。

² 柴田潮音氏は、現在エルサルバドルの政府機関(文化庁考古課)に席を置く。また、伊藤伸幸名古屋大学助教は、引き続きチャルチュアパ遺跡において考古学調査を実施している。

³ シンポジウム資料『ラテンアメリカ・カリブ海諸国共同体(CELAC)行動計画および綱要』の序文

⁴ メキシコに引き続き、2011年ニカラグア名誉領事館が京外大に設置。さらに2013年にはコスタリカ国立大学、ニカラグア・カトリカ大学との友好協定が結ばれている。

⁵ 各挿図は B. Sagrario, *INVENTARIO NACIONAL DE SITIOS ARQUEOLÓGICOS*, El Centro Arqueológico de Documentación e Investigación (CADI) del Departamento de Historia de la UNAN, Managua, 2011より作成。

⁶ カナダのカルガリー大学との共同調査を行っている。

●中央アメリカのトウモロコシ

長谷川悦夫(埼玉大学)

新大陸原産であるトウモロコシは、米、小麦とともに世界の三大穀物であり、メキシコと中米の国々で主食になっている。先スペイン期には、階段状ピラミッド、暦、黒曜石の石器などとともにメソアメリカを特徴付ける要素のひとつであった。スペインによる征服と植民地化後、先住民伝統は途絶えるか少数派の地位に追いやられたが、トウモロコシを主食とする食文化だけは、征服者であるスペイン人にも広がり今日に至っている。

トルティーリャとの出会い

そしてメキシコと中米諸国でトウモロコシといえばトルティーリャである。はじめてトルティーリャを食べたのは1990年代初めに青年海外協力隊員としてホンジュラスに赴任したときだった。トルティーリャが何かということは知識としては知っていた。「トルティーリャはメキシコや中米で主食として食べられるトウモロコシのパン」と聞いて、どんなものなのだろうかと、その味をいろいろ想像したものだ。当時の私にとって、トウモロコシとは祭りの屋台などで焼かれている、醤油の焦げたにおいも香ばしい黄色くて甘いスイートコーンだった。きっとトルティーリャも甘いのだろうと思っていた。

いざ、ホンジュラス西部コパン県のある町で生活するようになり、トルティーリャが想像していたのとはだいぶ違うものであると知った。それでも、最初のうちは物珍しくてトルティーリャをほおぼっていた。しかしだんだんと飽きてきた。私が下宿していた家では、ほぼ毎日、毎食、フリホーレスという豆とトルティーリャが出された。下宿していた家のお母さんに「トルティーリャ以外のもも食べたい」というと、朝食にはコーンフレークと牛乳が出されるようになった。トウモロコシにかわりはないのだが、下宿先は牧場を持っている家で、濃厚な味の牛乳は悪くなかった。

絶品！トルティーリャ

ある日、下宿のお母さんが、「これおいしいから食べてみて」とトルティーリャを私にすすめた。いつものよりもわずかに黄色くて厚みがあり、練

り粉の粒が粗いものだった。食べてみると確かにおいしいかった。甘みがあって香ばしい。普段はトルティーリャに、フリホーレスや醗酵しかけの酸味がある生クリーム、肉片や野菜、玉ねぎを唐辛子と酢で漬け込んだチリなどを乗せて、タコス状にして食べる。しかしこのときのトルティーリャは、そのままでもどんどん食べることができた。下宿のお母さんは自慢げに「これはトルティーリャ・デ・マイース・ヌエボ(獲れたてトウモロコシのトルティーリャ)なのよ」と教えてくれた。

穀類であるトウモロコシは保存がきき、それゆえ貯蔵が可能であることから古代文明を支えた。そのトウモロコシにも鮮度があると知ったのはこのときだった。きっと、米や小麦にも鮮度があり、刈り取ったばかりの米を脱穀・精米して炊いたら、おかず無しでもご飯だけで食べられるのだと思う。

ニカラグアのトルティーリャ

それから 20 年が経ち、フィールドからしばらく遠ざかっていた私であるが、2013 年になってニカラグアに出かける機会を得た。そして、またあのトルティーリャに再会することができた。

ニカラグア内陸部チョンタレス県で遺跡の踏査に出たとき、朝食をとるために入った道端の食堂で「グウイリーラ」を食べた。それは、トルティーリャ、クァハーダチーズ(プロセスチーズのような滑らかな食感はなく、ざらついて塩辛い)、そして生クリームが盛られた一皿である。ニカラグアでは「トルティーリャ・デ・マイース・ティエルノ(若いトウモロコシのトルティーリャ)」というらしい。いずれにせよ、収穫したてのトウモロコシで作られた香ばしくて甘いあの味だ。



グウイリーラ。ニカラグア、チョンタレス県

首都マナグアなどの都市ではなかなか食べられない、田舎ならではの安価でしかも贅沢なグルメである。

若き日にホンジュラスで食べた懐かしい美味に再びめぐりあい満足した私であったが、それも一度きりだった。考えてみるとニカラグアではそもそもトルティーリャをあまり食べない。代わって、朝食を中心に、ガヨ・ピントというフリホーレス入りの炊き込みご飯がよく食べられる。私はこれが好きで、日本に帰ってきてからも、インゲン豆を買ってきて自分で作ってみたりする。これと、バナナの薄切りを油で揚げたタハーダが主食の位置を占めているようだ。

さらに、ニカラグアから南に下りコスタリカに入ると、トルティーリャはほとんど食べない。主食は、ガヨ・ピントなどの米料理、フリホーレスなどの豆、バナナ、マニオク芋である。ニカラグア太平洋岸から、コスタリカ北西部のニコヤ湾周辺はメソアメリカの東南の辺境を形成している。メソアメリカ中心部ともいえるメキシコ、グアテマラ、ホンジュラス西部ではトルティーリャが主食になっており、そこから南へと下るにしたがって、食生活の中心がトウモロコシから米などに置き換わって行くのが興味深く思われる。また、ニカラグアでも、チナンデガという北部の町では、必ずトルティーリャが食事についているようだ。ニカラグア人の友人に聞いたところ、やはり北から南に行くにつれ、トルティーリャを食べる頻度が低くなるという印象を持つとのことだった。



街道沿いの食堂の昼食。ニカラグア、チナンデガ県

食文化の継続性と変化

もちろん、これをもって、メキシコと中米では

食生活のパターンが先スペイン期から現代まで変わらずに続いているということではない。中米の南部で多く食べられる米やバナナは、スペイン征服後に持ち込まれたものである。

また、トウモロコシにしても、現在では広く普及しているトルティーリャという食べ方は、マヤ地域やあるいはもっと東のホンジュラスやニカラグアには、スペイン征服後に広まったようである。ランダの『ユカタン事物記』によれば、当時のマヤ人は「パンを作っていた」という記述もあるものの、トウモロコシを、粥状のスープにして飲むことが多かった。今日ではアトレとかポソレと呼ばれるものである。また、論文や報告書を見ても、自分自身が携わった発掘調査の経験からも、コマルと呼ばれるトルティーリャを焼くための平らな土器は、マヤ地域では後古典期後期を除けば、ほとんど出土しない。エスノヒストリーを根拠にメソアメリカ東部ではトルティーリャは比較的新しいとする説は、考古資料からも裏書きされるようだ。

私が懐かしいトルティーリャに出会ったニカラグア内陸部は、そもそもメソアメリカ圏外であり、トルティーリャが普及したのはごく遅い時期だろうと推測される。

メソアメリカの一部とされるニカラグア太平洋岸も、この地がメソアメリカ化したのは後古典期に入ってからで、メキシコからの民族集団の移住による結果と考えられている。ところが、近年の発掘調査からは興味深い事実が判明している。

カナダの研究者らによって、ニカラグア南部太平洋岸グラナダ県とリバス県で、メキシコからの移住の痕跡を探す発掘調査が行われた。その結果、ミシュテカ=プエブラ様式の土器も出土するものの、コマルは出土せず、石棒や石皿などからもトウモロコシの痕跡は出なかったとのことである。興味深いのは、調査者らがラスパディータと呼ぶ細石刃であり、マニオク芋を調理した道具とも考えられる。

ニカラグアなど中央アメリカ南部で先スペイン期の主食がトウモロコシでなかったとすれば、有力候補となるのはイモ類だ。マニオク芋の中でも有毒マニオクは、毒抜きのためにすり下ろして水にさらす必要がある。植物化石として残りにくいイモ類の存在を推定するには、調理具の特定に頼

ることになるが、ラスパディータが有毒マニオクをすり下ろすおろし金だとすれば辻褄が合うわけだ。

このように、メソアメリカ的な要素の不在によってニカラグア太平洋岸ではメキシコからの移住とメソアメリカ化という従来の解釈に疑問が投げかけられる事態となっている。したがって、ニカラグアにおけるトウモロコシ食とトルティーリャも、じつは先スペイン期から続く伝統ではないということが強く推測されるのである。

中央アメリカで、北から南へと下るにしたがってトルティーリャの頻度が減っていくことは、先スペイン期の伝統が今も色濃く残ることを示唆している。ただし、そういった食文化も絶えざる文化変容の過程を経て現在に至っている。もしかしたら、そのうち、トウモロコシ生地のピザやハンバーガーができるかもしれないとおもう。

●「クリキンゲ」：アンデスのハヤブサ

大平秀一（東海大学）

アンデスといえばコンドル、コンドルといえばアンデス。日本はもとより、おそらく世界で定着しているイメージである。もちろん、ダニエル・アロミア・ロブレスというペルーの作曲家がサルスエラ(スペイン版オペラ)の序曲として作曲し、1970年に米国のサイモン&ガーファングルのカバーで世界に知られた「コンドルは飛んでいく」が大きな影響を及ぼしているのだろう。この曲は、今では日本の小学校の音楽の教科書にも楽譜付きで掲載されており、子供たちがリコーダーで演奏しているほどである。

しかし、「クリキンゲ(コレケンゲ)」という鳥となると、おそらく誰も知らない。かつては、コンドルに勝るとも劣らぬ、「由緒正しい」鳥だったと思われるのだが…。学名は *Phalacrocorax megalopterus*。「カラカラ」などと呼ばれる場合もある。コンドルと同様に標高の高い場所に生息する猛禽類で、体長 50cm 前後、翼を広げると最大で 130cm ほどになるハヤブサの一種である。写真で見ると、嘴の付け根(顔の一部)が黄色～橙色である。図鑑によれば、エクアドル～アルゼンチンに生息している。

エクアドルにおいて、この鳥の名はよく知られている。"Cara[s] Cara[s] Curiquingue, Cara[s] Cara[s] Curiquingue, alza la pata Curiquingue....."ではじまるエクアドルの有名な歌の影響も小さくはないだろう。山村の祭りでは、この音楽に合わせてよく踊っている。しかし、そればかりではない。多様な地域の祭りで、クリキングを模した様々なパフォーマンスがみられるのである。その一つに、南部高地の村々のヴィルヘンの祭りでなされ、私が毎年のように見ている「バカ・ロカ (vaca loca...狂った雌牛)」というものがある。これは、地元の楽隊が奏でる音楽に合わせて、荒れ狂う牛の周りを先住民夫婦に扮した男二人やクリキングに扮した人々（男性）が、牛をすり抜けるように動き回るパフォーマンスである。

牛は本物ではない。木の枠組みの上に牛の皮を被せ、二人の男性によって下から持ち上げられ、荒れ狂うのである。その皮は、祭りに際して供物として屠られた牛から取ったものだ。意図的に典型的な山村の先住民の装い・振る舞いを誇張する先住民夫婦は、巧みに牛をかわしながら動く。頭に三角帽子を被り（嘴を表す）、両腕に輝く翼を付け、それを上下させてピーピーと鳴きながら動き回るクリキングも、やはり牛をかわす。牛とクリキングの闘いが演じられる場合もあり、勝者はいつもクリキングである。（写真1）

これを見ていつも思い浮かべるのが、ペルーの「コンドル・ラチ」である。こちらは本物の牛とコンドルによって闘いがパフォーマンスされ、コンドルが勝利することになる。もちろん、牛がスペインを、コンドルがアンデスを表象している。



写真1 バカ・ロカ（右端がクリキング）

「バカ・ロカ」でも、威圧的で荒れ狂ったような牛（＝スペイン）を先住民夫婦（＝アンデス）やクリキング（＝山の神）が軽くいなし、最後はクリキングが勝利すると考えれば、両者の構造はうり二つだ。

エクアドルにも、コンドルは生息している。にもかかわらず、なぜペルーではコンドルで、エクアドルではクリキングなのか。キトにあるアンデス最古の教会サン・フランシスコの一つの礼拝堂の支柱に、クリキングとされるレリーフが彫刻されている。当然、エスクエラ・キテーニャ（コロニアル美術におけるキト派）の手による作品であろう。しかし、エクアドルにおけるインカ以前の土着の物質文化に、この鳥と断定できる表象は見当たらない。一方、ペルーの物質文化におけるその表象も、すぐには思い浮かばない。しかし、文書には出てくる。

Inca Garcilaso de la Vega は、その著 *Comentarios Reales de Los Incas* (1609) において、インカが戴く房飾り（マスカパイチャ）に、王のシンボルとして、「コレケンケ (corequenque)」(＝クリキング) の鳥の羽を2枚立てたと述べている。それらは左右の翼からそれぞれ取る必要があったという。その後の記述で、スペインのアカデミズム世界に向けて「私は信じていない」としながらも、ビルカノータの谷にひとつがい（二羽）のみがいて、極めて珍しい鳥が故にインカのシンボルなのだという先住民の声にも触れている。また González Holguín のケチュア語辞書 (1608) にも、"Cori qquenque"と出ており、



図1 Guamán Poma が示すクリキング（左）

「白色・褐色の猛禽」と説明されている。そして Guamán Poma (1613 頃) は、4 つのシンボルを組みこんだ「インカの第二の紋章」(図 1) を描いており、その一つに猛禽の絵を示して "Curi Quinquitica" と記している (John Murra らの校訂者は、「黄金のハチドリ」と注釈を入れているが、誤りであろう)。

エクアドルにおいて、なぜ広域にわたって、クリキングのパフォーマンスがみられるのだろうか。ケチュア語の名詞だし、エクアドルの土着の物質文化に表象されていないとすれば、ペルーからやって来たインカあるいはミティマエスの影響と考えるべきなのだろうか。ならば、ペルーの土器や織物に、その表象が見当たらないのはなぜか。見落としているだけなのか。いや、何よりも、ペルーの祭祀・儀礼におけるクリキングのパフォーマンスなど、見たことも聞いたこともない。植民地時代に消えてしまったのだろうか。疑問はいろいろと深まるばかりで、その内ゆっくりと調べてみたいと思っている。

ペルーの先住民が、ワマニ (山の神) がコンドルやハヤブサなどの「力強い」鳥に姿を変えて現れるという観念を抱いていることは、民族誌等より明らかである。よく見ると、アヤクチョ県などのハサミ踊りのダンサック (踊り手) が纏っている衣装にも、その姿は示されている。インカ以前の物質文化に目をやっても、コンドルやハヤブサと思わしき鳥の表象は少なくない。私たちにとって、その表象は鳥だが、先住民にとって、それは可視化されたワマニ (山の神) なのである。

クリキングという名詞の、"Curi"・"Cori"は、おそらく「黄金」でよいだろう。顔の色 (黄色) も、そのイメージに合致する。"quingue", "quenque" は不明瞭である。ただ、González Holguín の辞書 (1608) では、"qqencu qquenccu" に、激しく動き回る様子といった意味を与えている。また、「ジグザグ」の様態を意味し、その文様がみられることから、クスコの有名な遺跡名にもなっている "qqenqo" (ケンコ) もなかなかよい。時にそれは、山の神の重要な要素の一部であり、天から下る「稲妻」をも指すからである。

それにしても、バカ・ロカとコンドル・ラチは似ている。エクアドルとペルーという遠く隔たった二地域間にみられるこの類似性を、どのように

解釈すればよいのだろうか。先住民性の上に、スペイン人による「発見」・「征服」・「植民地化」が覆い被さるという共通の歴史・現象を経て、両地域ともに、牛をスペインに、「力強い」鳥をアンデス/山の神に見立てて闘争させ、鳥=アンデスが勝利するという、同質的なパフォーマンスが構築されている状況を見ると、アンデス先住民文化の「一本筋の通った思想・哲学・世界観」を強く感じ、それに感嘆・驚嘆してしまう。もちろん、再びアンデスの神々が復活してキリスト教の神に勝利し、やがて平和な時代がやってくるという、やはり遠く隔たった諸地域 (ペルー南部・ボリビア) で採取されている「インカリ神話」、そして 16 世紀の「タキ・オンコイ」、「ムル・オンコイ」を思い起こしながらである。

このクリキング、エクアドルでもずいぶんと生息数が少なくなっているらしい。いつかはお目にかかりたい.....エクアドルの最高峰チンボラソあるいはコトパクシの麓辺りが狙い目かな、などとずっと思いつけていた。

話し変わって、2013 年の調査。いつも通りムコブゴ遺跡付近のワシパンバ村にベースを張り、一部の期間は、セロ・インフィエルニーリョ (3260m) というインカ時代の聖なる山のピークを発掘した。ピークは狭くて、四方の内三方は断崖絶壁。危険極まりない場所もあり、ザイルを体に付けて仕事をした日もあった。見晴らしのよいピークで、村人の一人が、南東下方に見える断崖絶壁の岩場を指差して言った。「あそこにはクリキングのつがい、巣食っていたんだよ」。「えっ！ そうだったの。見てみたかったなあ」と私。数日後、ピークで仕事をしていると、「シュウイチ！ クリキングだ！」と誰かが叫ぶ。指さす方を見ると、私たちの目の高さより若干高い所を、二羽のクリキングが強い風に煽られながら雄々しく飛んでいる。大きくて、白と黒のコントラストがきれいな鳥だった。慌ててカメラを取りに行ったが、もうずい分と高く舞い上がってしまい、点のようにしか写らなかった。しばらくの間待ったが、もう戻って来なかった。「スペイン語の時制を聞き間違えたらしい」と思いながら、ブツブツ言って悔しがっている私に、村の人が話しかけてきた。「ワシパンバ村に、遊びに来るよ」。「え〜っ！ 何処に？」。

私は驚いて尋ねた。「ドン・〇〇の家の裏にある木さ。毎朝のように二羽でやって来て、お昼ぐらいまで遊んでいくんだ。シュウイチが住んでいる家（小屋）の辺りからも見えるよ」。

灯台下暗し。20年にわたって通い続けた村に、

クリキングが遊びに来ていたとは....。今年は、仕事が忙しくて、写真を撮りにいく日が作れなかった。来年は、しっかり写真におさめたいと思っている。それまで是非、元気に過ごしてもらいたい。

国際シンポジウム（本学会協力事業）の報告

■「Simposio Internacional: Nuevos horizontes de los estudios de Chavín（国際シンポジウム：チャビン研究の最前線）」

山本睦（国立民族学博物館機関研究員）

2013年11月30日（土）、国立民族学博物館第6セミナー室において、国際シンポジウム「チャビン研究の最前線」が開かれた。国立民族学博物館と科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(代表：関雄二)が主催し、本学会が協力しての開催であった。

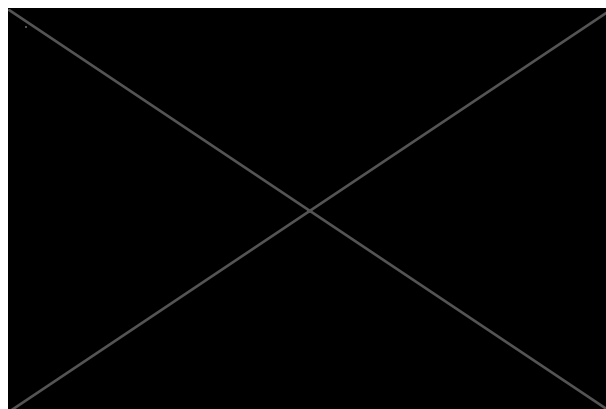
参加者は20名で、時間が足りなくなるほど、非常に緻密で白熱した議論が行われた。

発表者は、発表順にダニエル・コントレラス（ドイツ・キール大学）、クリスティアン・メシア（ペルー・国立ペルー文化博物館）、ジョン・リック（アメリカ・スタンフォード大学）、井口欣也（埼玉大学）、関雄二（国立民族学博物館）の5名であり、渡部森哉（南山大学）、松本雄一（山形大学）、芝田幸一郎（神戸市外国語大学）、山本睦（国立民族学博物館）の4名がコメンテーターをつとめた。

ジョン・リックらは、世界遺産にも登録されているペルー中部高地のチャビン・デ・ワントル遺跡の発掘調査を集中的に実施している。チャビン・デ・ワントル遺跡は、アンデス文明形成期（紀元前3000-1年）の代表的な神殿遺跡であり、アンデス文明形成期社会を論じるうえで、欠かすことのできない重要な遺跡である。しかしながら、

これまでに実施された多くの先行諸研究では、調査方法やデータの整理、成果発表などの面で不十分な点が多く、同時代の他遺跡との関係性を検証する際に問題が生じていた。

本シンポジウムの前半では、チャビン・デ・ワントル遺跡を調査するリックら3名により最新の調査データが提示され、その上で、編年や空間利用、権力などに関して議論が行われた。後半は、井口欣也と関雄二の2名によって、形成期の神殿遺跡であるクントウル・ワシ遺跡とパコパンパ遺跡における最新の調査成果が発表された。最後にはコメンテーターの発言を皮切りに、チャビン・デ・ワントル遺跡、クントウル・ワシ遺跡とパコパンパ遺跡のデータやそれにもとづく論考について、形成期研究のボトムアップを図るべく、総合的な議論が行われた。



(写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト)

フォーラム（本学会協力事業）情報

公開フォーラム

「古代文明の生成過程—西アジアとアンデス」

【日時】 2014年1月26日（日）13:00～16:00

【場所】 JPタワーホール&カンファレンス
ホール1

（東京都千代田区丸の内2丁目7番2号
JPタワー4階）

【定員】 170名（先着順）

【参加費】 無料 申込不要

【主催】 国立民族学博物館・科学研究費補助金基
盤研究（S）「権力の生成と変容から見た
アンデス文明史の再構築」（代表 関雄二）

【協力】 古代アメリカ学会

【趣旨】

西アジアの文明を専門とする国内の考古学者 2名を招へいし、権力生成に関して南米の古代文明と比較する研究フォーラムを古代アメリカ学会の協力を得て行う。これは、科研費プロジェクトの成果公開の一環であり、アンデス文明における権力生成とその変容を相対化するために、経済という視点を共有したうえで、文明間の比較を行うことを特色とする。こうした広い視野に立ったテーマ設定を行うことで、学問領域の細分化が進み、個別具体性への関心が高まり、普遍化、一般化への試みが顧みられない現代の学問潮流に一石を投じることができると考えられる。

このフォーラムを通じ、西アジアにおいて成立した古代文明の経済的基盤を明らかにするのみならず、権力形成という視点を通して、経済を支えていた農作物、海産物、動物資源、そして他の自然資源自体に刻み込まれた世界観にまで光を当てる予定である。これにより、生態学、あるいはマルクス主義的歴史観の中で矮小化されてきた先史時代の資源利用をより多角的、複合的にとらえることが可

能になる。また西アジアと比較することで、アンデス文明の特徴が浮かび上がることは間違いない。結果として、これは文明論の新たな研究動向を一般社会に公表し、人類の未来像を探るための機会を提供することにつながると考えられる。

【プログラム】

13:00～13:05

あいさつ

13:05～13:35

「西アジア最古の『神殿』

—アナトリア考古学最新事情」

三宅裕（筑波大学）

13:35～14:05

「西アジアにおける文明形成と社会変容

—最近の調査成果を中心に」

下釜和也（古代オリエント博物館）

14:05～14:35

「古代アンデスの神殿と世界観

—ワカ・パルティエダ遺跡の壁画をめぐる」

芝田幸一郎（神戸市外国語大学）

14:35～15:05

「ジャガー人間石彫の発見

—アンデス文明における社会的格差の出現」

関雄二（国立民族学博物館）

15:05～15:15

休憩

15:15～16:00

ディスカッション

【問い合わせ先】

〒565-8511

大阪府吹田市千里万博公園 10-1

国立民族学博物館

TEL : ██████████ FAX : 0██████████

E-mail ██████████

■第2回西日本部会研究懇談会

『古代社会へのまなざしVol. 2』

5月の東日本に続き、西日本部会も第2回研究懇談会を開催した。6月29日、土曜の午後、開催地である京都市は快晴で、34度に達する真夏日となった。今回の会場は京都文化博物館の別館（旧日本銀行京都支店）であり、我が国の重要文化財に指定されている。この100年以上の歴史を誇る館で、中庭から微かに漏れ聞こえるクラシック音楽の生演奏を背景に、研究三昧の3時間半を過ごすのは贅沢なことであった。会員の村野正景氏（京都文化博物館）には、素晴らしい会場の提供のみならず、懇親会にもご尽力頂いた。重ねてお礼申し上げたい。

東日本部会と同様に、博士学位論文完成に向けて執筆中の会員2名の発表となった。2本とも古代アンデス研究という偏った編成になってしまったが、フタを開けてみると、メソアメリカを専門とする会員にも多数参加してもらえた。彼らから「刺激を受けた」というコメントを聞いたのは幸いである。なお、参加総数は26名で、内22名が会員、4名が非会員であった。発表者とコメント者を除いても、関東から4名、名古屋および金沢から4名が参加した。

発表者とタイトルは下記の通り。内容に関しては、学会ウェブサイトに抄録を掲載しているので、そちらを参照して頂きたい。

①清家大樹（筑波大学大学院博士後期課程・聖マリアンナ医科大学）「先スペイン期ペルー北部高地におけるラクダ科飼養の開始と変遷—動物考古学的アプローチから—」

②松本剛（南イリノイ大学人類学科博士課程）「死者とともに生きる：シカン遺跡における宗教儀礼の本質とその変容過程について」

清家会員の発表には、コメントーターとして鶴澤和宏会員（東亜大学）の力添えをお願いした。やや専門性の高い内容ゆえ、研究の背景を広く解説して頂いた。他の参加者も含めたコメントの論調は、前例のない質・量の資料を分析し、その結果も大変興味深いと評価するものだった。一方で、研究成果の位置づけや重要性を明確に説明するこ

とが今後の課題として残された。

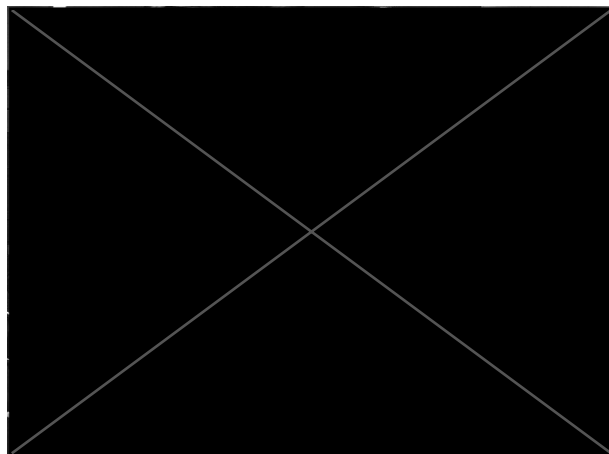
博士論文の研究が進んでいる会員をタイミングよく見つけられず、当初は清家会員の発表1本の予定であった。全体の調整が終わりつつあった5月半ば、松本会員が米ダンバートンオクス研究所での任期を終え、一時帰国予定と知った。在外会員と密な研究交流ができるまたとないチャンスである。慌てて連絡をとり、再調整もなんとか間に合ったが、各所にご迷惑をおかけした。この場を借りてあらためてお詫び申し上げたい。

松本会員の発表では、筆者がコメントーターを兼任した。建設的な批評を心掛けてはいたが、筆者の研究者魂のツボを突く内容に唖らされ、思わず絶賛してしまった。幸いにして、鶴見英成東日本部会幹事を始めとするベテラン会員諸兄が、データと仮説の結びつきが弱い部分などに冷静な批判を加えてくれた。

両発表とも活発にディスカッションが行われたため時間は足りなくなり、そのせいか参加者の大半が懇親会へ流れ込んだ。学生が多く、これまた活況を呈した。

研究懇談会は、軌道に乗り始めたのかもしれない。筆者は2年前から広報委員として学会ウェブサイト管理運営しているが、最近アクセスを分析して驚いた。今年の東西研究懇談会の案内が、この2年間で最も注目を集めたページと判明したからだ。研究大会のジュニア版等ではなく、大会と相互補完の関係にある特色ある活動として、今後も懇談会を充実させていきたい。

（西日本部会幹事：芝田幸一郎）



第 18 回研究大会報告



本学会第 18 回研究大会（主催：古代アメリカ学会、後援：山形大学）は 2013 年 12 月 7 日（土）に山形大学で開催され、学会員 41 名、一般参加者 11 名、計 52 名の参加があった。調査速報が 15 本、研究発表が 3 本発表された。発表の詳細は以下のとおりである。

調査速報（8：40 - 15：00）

8：40 - 9：00

「クントウル・ワシ遺跡出土土器の原材料に関する研究」

井口欣也（埼玉大学）

イサベル・ドルック（ウィスコンシン大学マディソン校）

本発表は、ペルー北部山地の形成期神殿遺跡、クントウル・ワシ出土の土器の原材料に関する研究について、これまでの分析結果を提示する。

この研究では、土器の破片資料 88 点のサンプルを岩石学的観点から観察した。また、遺跡周辺の地質学的情報や現代の土器製作に関するデータと比較した。その結果、以下のようなことが明らかとなった。

①最初のイドロ期（前 950-前 800 年）には珪長質火山岩の混和材が優勢（約 68%）である。火山岩はそれ以後の時期でも持続的に使用されている。

②2 時期目のクントウル・ワシ期（前 800-前 550 年）になると、貫入岩の混和材が増加し（約 11% → 約 24%）、さらに 3 時期目のコパ期（前 550 年 - 前 250 年）になると、貫入岩混和材は約 70% と優勢になる。

③同遺跡の土器に使用された火山岩混和材は、地質資料との比較から、遺跡周辺で採取された可能性が高い。

④主要な貫入岩体は遺跡周辺にはないが、遺跡 50 キロ圏内には 3 カ所ある。したがって、同遺跡の貫入岩混和材（土器の原材料の一部）はこれらの岩体から採取されたか、周辺の二次的堆積物から採取したと考えられる。

⑤土器の様式的分析と総合すると、クントウル・ワシ期では多様な原料採取地と土器製作者を背景とし、同時に多様な外形的特徴を有する祭祀土器が集まったといえる。一方コパ期では、原料採取地は多様だが、原料調整技術と外形的特徴には標準化の傾向がみられる。

以上の土器原材料の分析結果は、他の考古学データと総合することによって、この神殿に生じた社会経済的変容を明らかにするデータのひとつとして位置づけることができる。

9：00 - 9：20

「チャンカイ文化の染織品に関する分析調査概報」

浅見恵理（国立民族学博物館外来研究員）

瀬尾有紀（YachayWasi 修復保存研究所染織部研究員）

本研究の目的は、ペルー中央海岸チャンカイ谷に位置するサウメ遺跡から出土した染織品の分析調査を行ない、その結果からチャンカイ文化の染織品の生産システムについて考察することである。

これまで、先史アンデスの染織品に関しては技術的側面やデザインおよびモチーフに主眼をおいて研究が進められてきた。なかでもチャンカイ文化については発掘調査が皆無に等しいことから、染織品研究も博物館所蔵や個人コレクションの出土遺跡不明の資料が分析対象とされてきた。いわば考古学的なコンテキストをもたない資料を対象として、染織の技術論が先行してきたといえる。

発表者は2009年にチャンカイ谷で発掘調査を実施し、自然遺物を含む良好な考古学的データを獲得した。染織品は、基壇や部屋状構造物から出土している。さらに、部屋状構造物からは染織品の製作に関わる工具や残滓も出土した。このような状況から、本遺跡で染織品が製作されたと推測される。そこで、本研究では染織品および染織品生産に関連する遺物の詳細な分析を行い、緒要素の特徴を把握して製作技術や生産工程を明らかにすることが目的である。

調査方法は、ルーペを使用した肉眼観察に基づいている。収集された多くの染織品資料は断片であり、塩分を含んだ土壌に埋もれていた。そのため、まず表面の清掃作業を行ない、次に観察という手順を踏んだ。分析項目は、織技法、素材、技術的側面、色彩、デザイン等である。

分析の結果、ほとんどの染織品が平織りで、無文もしくはチャンカイ文化に特有の茶色・青色・白色の縞模様を呈していた。その他に、紗織りや、ネコ科動物を表した綴れ織りもわずかにみられる。技術面では、北海岸に特徴的といわれている技法も観察され、中央海岸の技法との対照が際立つ点も指摘できる。

本遺跡における染織品生産の背景には多様な要因が想定でき、近隣諸社会との関連性も含めて生産システムを復元する必要がある。

9:20 - 9:40

「ペルー北部チョターノ川流域の遺跡踏査」

山本睦(国立民族学博物館機関研究員)

本発表では、ペルー北部チョターノ川流域における遺跡分布調査の成果を報告した。チョターノ川はアンデス山脈分水嶺の東側を流れ、ワンカパンバ川と合流しながらマラニョン川へと注ぐ河川であり、その流域範囲は広大である。同流域には

アンデス形成期(紀元前2500-50年)の代表的な神殿として著名なパコパンバ遺跡や、ペルー最古の土器事例の一つを有するパンダンチェ遺跡があり、これらを中心に複数の遺跡で発掘調査が行われてきている。また、パコパンバ遺跡の周囲を中心にごく簡単な遺跡踏査も実施されており、神殿とよばれるような基壇やテラスを有する遺跡や、チュルパと呼ばれる塔状墳墓の存在が報告されている。さらに近年では、国立民族学博物館(日本)とサン・マルコス大学(ペルー)の共同調査団により、パコパンバ遺跡で集中的な発掘調査が展開されており、充実したデータが着実に積み重ねられている。

しかし、先行研究の主対象は、特定の大規模、あるいは際立った遺跡にあったため、チョターノ川流域という地域的枠組みにおける考古学的状況については、いまだ不明な点が多い。これをふまえて本研究では、同流域のなかでも調査が充実し、編年体系が明確なパコパンバ遺跡を中心とした比較的狭い地理的範囲で集中的な踏査を実施した。調査目的は、第一に、体系だった遺跡分布調査が存在しない地域で考古学的基礎データを獲得し、研究のボトムアップを図ることである。そして、遺跡分布調査データを発掘データに総合していくことで、流域内の各遺跡間の時間的空間的関係性、つまりセトルメント・パターンの通時的変化を明らかにしていくことが、第二の目的である。

調査の結果、パコパンバ遺跡を除く、計120の遺跡を確認した。形成期に属するものはそのうちの40遺跡である。本発表では、遺跡の形態的特徴や、生態環境との関わりなどをふまえながら、チョターノ川流域社会、とくに形成期社会の展開について、遺跡間の関係性や地域間交流といった新たな見識に基づいて論じた。

9:40 - 10:00

「ペルー北部ワカ・パルティエダ神殿遺跡の第3次発掘調査」

芝田幸一郎(神戸市外国語大学)

発表者は2002~2005年に、ペルー北部中央海岸ネペーニャ河谷下流域にて、形成期の遺跡調査を集中的に行った。川を挟んで近接する2つの神殿セロ・ブランコとワカ・パルティエダの発掘で

ある。今回8年ぶりの継続調査を実施した遺跡は後者であり、形成期中期(1100-800BC)から後期前半(800-450BC)にかけて繁栄したことや、中期には複数の壁画(レリーフを含む)で彩られていたこと等が、これまでの調査で判明している。2013年夏の発掘調査では、形成期中期の神殿外壁において幅5mを超える2面の壁画(多彩色のレリーフ)を発見して掘り出し、さらに4面の存在を確認した。また形成期後期の建築にも彩色が施されていたことを確認した。2005年までの成果と総合すると、形成期中期の神殿外壁は、ほぼ全面が壁画で覆われていたことになる。さらには、各壁画は建築上の位置と結びつく形で意味を付与され、複数の壁画の組み合わせで一つの世界観を表していた可能性も出てきた。今回の研究大会では、新規発見した壁画を中心とする速報を行った。

10:15-10:35

「ヘケテペケ川中流域モスキート平原・ラマダ平原の遺跡分布調査」

鶴見英成(東京大学総合研究博物館)

カルロス・モラレス(ペルー国立サン・マルコス大学)

発表者は2003年よりペルー共和国カハマルカ県のヘケテペケ川流域、とくに中流域北岸のアマカス平原を中心として調査を重ね、形成期前期(紀元前1500-1250年)から中期(紀元前1250-800年)にかけての神殿建築の変遷を解明した。そしてその背景にある社会過程を論ずる上で、土器の導入が定住化の重要な契機であったと考えた。しかし2009年、南岸モスキート平原西端の大規模な岩絵「フェリーノ」至近での発掘により、その周囲の2つのマウンド(B1基壇・C1基壇)に土器が伴わないことを確認した。また2011年にはモスキート平原東端の大規模マウンド(Z1基壇)を発掘し、やはり土器が不在であること、また上記3地点の年代測定結果がいずれも紀元前2千年紀前半に対応することがわかった。

このことからすでに形成期早期(先土器期末期、紀元前2000-1500年)において、モスキート平原に大規模公共建築群が築造されていたとの見通しを得た。アマカス平原の神殿群に先立つ事例であり、それらの成立・放棄の過程は、地域社会の動態を論じる上で解明すべき課題である。またヘケ

テペケ川流域で最古の神殿群という可能性が高いため、アンデス西斜面における定住化の進行という、より巨視的な課題に資するデータが期待される。そのため2014年・15年にかけて平原内の複数地点を大規模に発掘することとし、その準備として2013年9月、遺跡群の精査とトータルステーション測量を実施した。本発表にてその成果と今後の調査計画を提示した。

形成期前期以降のアマカス平原の基壇建築群が土砂を主体として盛られているのに対し、形成期早期の基壇建築は石を多く含み、それが崩落すると小高い石の山となる。類似した外観の基壇建築はモスキート平原の約30地点で確認される。またモスキート平原の東端はフィラ・カラネロス山に連なる小峰で区画されるが、その山頂を皮切りに、より東方へと展開するラマダ平原でも約15地点にて類例を確認した。基壇の形態と空間的分布の関係、また同時代の図像である「フェリーノ」の可視性など、景観の構築過程に焦点を当てながら発掘・年代測定を計画していく。

10:35-10:55

「ペルー・パコパンパ遺跡出土人骨の生物考古学的研究—2013年度調査速報—」

長岡朋人(聖マリアンナ医科大学)

森田航(京都大学大学院博士後期課程)

関雄二(国立民族学博物館)

鵜澤和宏(東亜大学)

フアン・パブロ・ビジャヌエバ(ペルー国立サン・マルコス大学)

マウロ・オールドーニェス(ペルー国立サン・マルコス大学)

ディアナ・アレマン(ペルー国立サン・マルコス大学)

ダニエル・モラーレス(ペルー国立サン・マルコス大学)

パコパンパ遺跡は、ペルーの北高地、カハマルカ県チョタ郡に位置する形成期(2500~1BC)の祭祀遺跡である。2005年度から日本の国立民族学博物館とペルー国立サン・マルコス大学の学術交流協定に基づく共同調査がはじまった。調査は、考古学、形質人類学、動物考古学、同位体化学分析の分野横断的な分析に基づき、アンデス文明の成立過程の解明を目指すものである。本研究の目的は、2005~2012年度のパコパンパ遺跡の発掘で出土した人骨を調査し、個々の出土人骨の鑑定結果の記載と基礎データを提示し、生物考古学的

な考察を行うことである。その結果、(1) 頭蓋、下顎骨、歯が残る 47 体の年齢構成は、15 体 (31.9%) が 14 歳以下の未成年、32 体 (68.1%) が 15 歳以上の成人であった。32 体の成人のうち、性別判定ができた 24 体の男女比は 10:14 であり、性比は女性に偏っていた。未成年のうち、15 体中 13 体が 0 歳であった。簡易生命表によると、0 歳以降の生存率は、5 歳に至るまで 27.7%が死亡、15 歳までに 32%が死亡した。また、0 歳時平均余命は 24.1 歳、15 歳時平均余命は 18.8 歳であった。

(2) パコパンパ遺跡出土人骨の推定身長は、4 体の男性の平均が 163.1m、9 体の女性の平均が 148.7cm であった。(3) パコパンパ遺跡の永久歯には 444 点中 72 点 (16.2%) に齧蝕を認め、そのうち男性は 188 点中 33 点 (17.6%)、女性は 256 点中 39 点 (15.2%) であり、男女間に有意差はなかった ($P>0.05$)。齧蝕部位は男女とも隣接面に多く、次に歯冠全体に及ぶ齧蝕が続いた。

10:55-11:15

「ペルー北部高地パコパンパ遺跡における哺乳動物利用」

鵜澤和宏 (東亜大学)

関雄二 (国立民族学博物館)

マウロ・オールドーニェス (ペルー国立サン・マルコス大学)
ディアナ・アレマン (ペルー国立サン・マルコス大学)
フアン・パブロ・ビジャヌエバ (ペルー国立サン・マルコス大学)

ペルー北高地に所在するパコパンパ遺跡 (カハマルカ県) における考古学調査が進行している。2007 年に着手し、7 シーズン目をむかえた動物骨資料の分析は、資料数が 1 万点を超え、他遺跡との定量的比較が可能な状況となった。また、出土資料の所属年代について部分的な見直しが行われたことから、考古動物相の経時的変化についても再検討する必要が生じた。以上のような経緯から、今年度調査終了時点における動物考古学調査の所見を整理し、特にラクダ科家畜の導入に関する知見を速報として報告した。

古代アンデスでは、紀元前 4000 年以降、シカやグアナコを対象とする狩猟が衰退し、2 種のラクダ科家畜の飼育に置きかわっていく。しかし家畜がアンデス広域に拡散した過程の解明は遅れている。

こうしたなか、北高地を対象とした発表者らの調査は新たな知見をもたらしてきた。先行して実施したクントウル・ワシ遺跡出土骨の調査からは、北部高地へのラクダ家畜導入は形成期後期であり、家畜化の起源地と推定される中央高地から順次拡散したとする、地理的勾配モデルを提唱した。

パコパンパ遺跡においても、形成期中期に相当するパコパンパ I 期にラクダ科資料はごく少量検出されるのみで、形成期後期のパコパンパ II 期に増加することが確認された。しかし、形成期後期におけるラクダ科構成比は、より起源地に近いクントウルワシ遺跡よりも高く、単純な地理的勾配モデルでは説明できないことが明らかとなった。家畜ラクダを導入するか否かは、代替資源の質・量、社会的要請など複雑な要因によって決定されたことが示唆される。

11:15-11:35

「ペルー北高地パコパンパ遺跡における石彫の発見」

関雄二 (国立民族学博物館)

マウロ・オールドーニェス・リビア

(ペルー国立サン・マルコス大学)

本発表では、ペルー北高地パコパンパ遺跡において、国立民族学博物館・ペルー国立サン・マルコス大学合同調査団が本年 8 月に発見した石彫について、その出土状況を考察した。既述の石彫が発見された場所は、パコパンパ遺跡第 1 基壇から第 2 基壇に上がる階段の登り口にあたる。この階段は、編年上、パコパンパ I 期後葉 (B.C.1000~B.C.800 補正後) に築かれ、パコパンパ II 期 (B.C.800~B.C.500 補正後) に再利用され、自然崩壊の後、前期中間期にあたるカハマルカ前期の人々の手によって完全に封印されたことが今年の調査で判明した。この段階の利用過程は、石彫の利用の変化と一部同調している。

石彫は石灰岩を用いており、その表面には高浮き彫り技法で猫科動物的な牙を持った顔と人間的な胴部を組み合わせた姿が表現されていた。肘を曲げ、胸元で両手を組んでいる。禪をつけているが、足は表現されていない。大きさは、高さ 1.60m、幅 0.43m、厚さ 0.24m である。

とくに猫科動物的頭部は、石彫の制作が形成期

にさかのぼることを示唆している。石彫は原位置を保ってはいないが、遺跡全体を貫く建築の中心軸付近で発見されていること、保存状態がよく、第2基壇から落とされたとは考えにくいことなどから、階段の登り口に据えられていたと推測される。その場合、少なくともII期には石彫が立っていたことがうかがわれる。

興味深いのは出土状況である。石彫は、階段を封印した小石群とともに、うつぶせの状態で見発見された。しかも石彫頭部の周辺だけに大型の切石が積み、傍らにミニチュア土器が奉納されている様子が検出された。こうしたことから、石彫は、階段の崩壊と封印の過程で意図的に倒されたものの、その力を恐れてか、事前に封印の儀礼が執り行われたと推測される。ミニチュア土器は、形成期よりも後の地方発展期（前期中間期）にあたるカハマルカ前期（紀元後200～500年頃）に属すると考えられ、階段と石彫の封印はこの時期に行われたと考えられる。こうした後代の人々による遺構への奉納と封印は、第3基壇上の方形半地下式広場でも認められ、遺跡全体で起きた現象といえる。

11:35 - 11:55

「ペルー北部高地、エル・パラシオ遺跡 2012 年出土遺物分析概報」

渡部森哉（南山大学）

しばしばインカ帝国の祖型と見なされるワリ帝国（A.D. 600-1000）の研究が最近急速に進展している。例えばエスピリトゥ・パンパ、サンタ・ロサ・デ・プカラ、カスティヨ・デ・ワルメイなどの遺跡で、ワリ帝国の地方支配の特徴を解明する重要なデータが得られている。ペルー北部高地におけるワリの存在は不明瞭であったが、2008年度にカハマルカ地方に位置するエル・パラシオ遺跡の発掘調査が始まり、徐々にその性格が明らかになりつつある。2010年、2012年にも発掘調査が行われ、大量の遺物が出土している。今回は主に2012年度の発掘調査の概要報告と土器分析の予備報告を行った。

エル・パラシオ遺跡は100ヘクタール以上の広まりを有すると見積もられているが、その大部分は地下に埋もれている。そのため他のワリ関連遺

跡とは異なり、地表から大まかな建築プランを確認することはできず、発掘調査によって明らかにする必要がある。アクセスのコントロール、壁が直交する設計、半地下式の墓などワリの建築の一般的な特徴を示している。一方で、建物が同じ場所で何度も改修される特徴などは他のワリ関連遺跡にはあまり認められず、首都ワリとクスコのワリ遺跡群でのみ確認されている。また埋葬や奉納が多く確認されていることも特筆すべき特徴である。

2012年の第三次発掘調査では6トンもの遺物が出土しており、そのうち4トンは土器である。現在分析を進めている途中であるが、9割以上の土器片は在地のカハマルカ文化のものであることは再確認されており、地方のワリ関連遺跡ではワリ様式の土器は全体の10%以下であるという傾向と合致する。それ以外の土器は搬入品ではなく、カハマルカで製作されたと考えられるものが多く、他地域とのインタラクションを考える手がかりとなっている。

以上のデータを総合的に解釈し、エル・パラシオ遺跡はワリ帝国の地方行政センターであったと考えられ、カハマルカ地方は直接支配下にあったと考えられる。帝国の特徴として、政治的統一性と文化的民族的多様性が挙げられるが、エル・パラシオの土器に認められる多様性の増加は、帝国モデルと合致する。放射性炭素年代によれば、エル・パラシオのB区が利用されたのは後800-1000であり、年代的整合性もある。エル・パラシオ遺跡とその周辺以外で、ワリ文化の証拠が見つからないことは、その統治の管轄が広く、中央集権的支配の証拠と考えることができる。

13:00 - 13:20

「エクアドル南部におけるインカ国家の拡大（第2次～第3次）」

大平秀一（東海大学）

森下壽典（東海大学・早稲田大学非常勤講師）

16世紀前後のアンデス先住民社会には「インカ帝国」の名が冠せられ、文字なき民の実像を置き去りにしたまま、現代社会の文化資源の一つと化し、消費され続けている。インカ像の源泉は、クスコのインカが強力な軍隊を駆使して諸社会を

制圧して拡大をはかるといった、ローマ帝国像の影響下でスペイン人が書き残した文書記録にある。しかしながら、それらの文書記録の内容を支持する、大規模な抗争の痕跡を示す考古学的資料は、これまでに一切確認されていない。

発表者は、1994年以後エクアドル共和国南部に位置するアスアイ県ならびにエル・オーロ県の境界付近で遺跡調査を進め、インカ研究史上はじめて大規模な武力抗争の資料を得つつある。それらは、おそらく武力抗争を経て建設途上で放棄された二つの行政センター(ミラドール・デ・ムユプンゴ遺跡[3200m]とラ・ソレダー遺跡[1800m])と、その抗争の犠牲者を埋葬したと考えられる概算で3000~5000基もの墓である。墓は、二つの中心的な遺跡の周辺およそ10km×10km以上のゾーンにわたって、丘上や尾根上などに散在している。

2013年7月~9月、これらの墓を中心として、ミラドール・デ・ムユプンゴ遺跡周辺域と、ラ・ソレダー遺跡周辺域において、発掘調査ならびに考古学的一般調査を実施した。本発表では、その調査成果の概要を報告した。なお、2013年夏季に実施した発掘調査・一般調査は、科学研究費補助金(基盤研究B、研究課題名:「エクアドル南部におけるインカ国家の拡大をめぐる実証的研究」)の一環として実施されたものである。

13:20 - 13:40

「チマルパイン『第七報告書』に見る自然災害と自然現象の記録」

井上幸孝(専修大学)

メソアメリカでは絵文書等に歴史が記録されていたが、その記録内容は政治や宗教にかかわる事象に限られていたわけではない。自然災害や自然現象に関しても記録が残されていたことは、征服後まもなく作成・複写された絵文書の記述からも確認することができる。さらに16世紀末から17世紀前半には、アルファベットの普及により、いわゆるクロニカ(記録文書)類が多く記されることになる。本発表ではメキシコ盆地に関する代表的な記録文書の一つを取り上げ、そこに記された自然災害と自然現象の記録内容を見るとともに、ナワトル語での記述を検討した。

ドミンゴ・チマルパイン・クアウトレワニツィ

ン(Domingo Francisco de San Antón Muñón Chimalpain Cuauhtlehuanitzin)はメキシコ盆地南東部のチャルコ地方の先住民貴族家系に生まれ、人生の大半をメキシコ市周辺で過ごした。17世紀初頭に主として年代記形式の多くの文書(現代ではそのほとんどは『歴史報告書集 *Différentes Histoires Originales*』と総称される)をアルファベット表記のナワトル語で書き残したほか、テソソモクやゴマラなど他のクロニカの写本作成者としても知られる。ここではその中でも特にまとまった分量と記述内容の『第七報告書』を取り上げた。

『第七報告書』には、飢饉や洪水など天災の記録がある。1450~54年の大飢饉のように他の多くの記録文書や絵文書に記されたものと同じ出来事を記述している場合もあれば、いくつかの不作年の情報に見られるように、この文書にしか記録が残されていない情報もある。また、『第七報告書』には、地震・日蝕といった情報も記されており、そのいくつかは一部の絵文書の記録内容と合致しているものの、他の記録には残されていない年の情報もこの文書には含まれている。

『第七報告書』が絵文書と異なるのは、ナワトル語の文章で記されているという点である。例えば皆既日食と部分日蝕の区別は絵文書ではどのようになされていたのかが不明だが、チマルパインの記述ではより補足的な表現が含まれ、絵文書だけで得られない情報や具体的な出来事を表現するのにどのようなナワトル語表現が用いられていたかを知ることができる点で貴重な情報源であると言える。

13:40 - 14:00

「アステカの「戦争」に関する一考察」

井関睦美(明治大学)

人類史において「戦争」とは、多くの場合、大量殺戮、敗北した都市や国家の消滅およびその社会体制の崩壊、政治・経済・技術変革などをもたらす行為と理解されている。一方、アステカ王国史(1428-1521年)における「戦争」は、戦場における戦闘、捕虜の確保、事後の捕虜の人身供犠という一連の活動を指す。火薬のような大量殺戮が可能な兵器や機動力の高い馬のような大型動物

が存在しなかったアステカ社会では、敵地を殲滅する行為は戦争の主目的とはならなかった。しかし捕虜の殺人行為は、太陽神への供犠という形で宗教儀礼の一部として昇華され、公共の場で庶民にも経験された。

アステカの戦争は、おもに宗教的意義と経済的機能という2つの視点から論じられることが多い。まず戦争は、アステカの太陽神に捧げる捕虜の心臓を確保するために不可欠な宗教儀礼の一部であり、生贄の儀礼はその宗教思想を共同体が共有する機会でもあった。またアステカ王国軍の遠征は、支配領域の拡大と資源の獲得、被支配都市への貢納品の課税を目的とする経済戦略の一つでもあった。王国の高位の戦士が着用する威信財をふんだんに取り込んだ装束の製作は、被征服地に貢納品として課され、王国の社会規範や戦争の政治・宗教的意味を間接的に浸透させる役割も果たしていたと考えられる。

アステカの戦争も組織集団による暴力であることに変わりないが、被征服地を壊滅状態に陥れたり、宗教を強要したり、都市や共同体を根本から覆す行為は伴わなかった。被征服地には貢納と交易という経済活動に参加させるため、極力その政治組織や社会体制を維持させておく必要があったのである。つまり戦争は、変革をもたらすというよりも、王国のシステムを存続し拡大するための戦略的社会制度であったと分析できる。本発表では、アステカの戦争の社会的機能について、考古遺物、絵文書の記録、植民地時代の文献史料から再考を試みた。

14:00 - 14:20

「ティカル、コパン、エル・プエンテの博物館」

多々良 穰 (金沢大学大学院博士後期課程)

五木田まきは (金沢大学大学院博士前期課程)

金沢大学は、2011年にグアテマラの世界遺産「ティカル国立公園」、2013年にホンジュラスの世界遺産「コパンのマヤ遺跡」に関して、各国政府とそれぞれ交流協定を締結した。また2013年夏に金沢大学は、「エル・プエンテ考古学公園」で大学院の文化資源学現地研修を実施した。今回の発表では、2013年春～夏の調査をもとにこれら3ヶ所にある博物館の現状報告をし、問題点を明らかにした。

かにした。

ティカルには、石碑博物館とティカル博物館があり、2012年には保存研究センターも開館された。前者2つの博物館は展示方法の改善が必要だが、特に石碑博物館は石碑16が倒れたままの状態で見られる。保存研究センターは、収蔵・調査研究・保存修復・教育普及の4部門を意識して建設されたが、一般客への還元のために職員を育成し、体験学習等の教育普及活動を活発にすることが望まれる。

コパンには、石彫博物館とコパン村の地方考古学博物館がある。前者は遺跡公園に隣接し、石彫の保存・管理と訪問者への展示を目的としている。ロサリラ神殿が復元されるなど、訪問者を考古学に誘う工夫が見られる。後者は2012年12月にリニューアルオープンされ、未公開だった遺物も含めて特別展が開かれている。2014年中には土器中心の展示に再編される予定だが、職員の専門知識と人員不足が課題である。

エル・プエンテ考古学公園は、青年海外協力隊の尽力により1994年にオープンした。併設するビジターセンターは、「編年と交易」「エル・プエンテ遺跡」「日本文化」の3部屋で構成され、屋外展示も行われている。縄文土器などが展示されている日本文化室は、他のマヤ遺跡にない独特のものである。現在修築中で2014年3月のリニューアルオープンを予定しており、経済的な近隣コミュニティへの貢献も期待される。

文化資源として博物館を利活用するためには、「観光」「広報」「教育」の地域住民も関わる分野に、「研究活動」「国際協力」をからめた地域住民参加型の方策が必要である。

14:20 - 14:40

「ティカル、北のアクロポリス・プロジェクトによる測量調査—遺跡中心部における高精度座標データの取得と活用—」

中村誠一 (金沢大学)

今泉和也 (北海道大学大学院博士後期課程)

福井理恵 (金沢大学大学院博士前期課程)

金沢大学が主導する北のアクロポリス・プロジェクトでは、ティカル国立公園技術部門と協力して北のアクロポリスを中心とした広範囲な測量調査

を実施しており、精度の高い測量図を作成している。一方で1961年にRobert Carrらによって発表された16km²に及ぶ遺跡地図はペンシルヴァニア大学の成した大きな成果の一つである。この遺跡地図は現在までに様々な研究に用いられてきたが、北のアクロポリス・プロジェクトによる測量調査の結果、旧地図は決して少なくない誤差や歪みを有していることが明らかとなった。

旧図面作成時に用いられたプラニメトリック法は多くの未調査建造物を含む広域地図作成において現在も尚、有効な手法である。しなしながら調査が進み、測量機器やGISが発達した現在、再度正確な測量調査を行う必要がある。そこで得られたデジタルデータや、それに基づく高精度の遺跡地図を新たな研究に活用すべきであり、これまでの先行研究の見直しを図ることも可能である。またデジタルデータはアーカイブ化することでより簡便に配布することが可能である。

ペンシルヴァニア大学は16km²の図面化に際して、複数の測量調査チームと機材を動員しても4年の歳月を要した。我々は専門人員・機材の問題、そして何より精度維持の問題からより多くの時間を要するであろう。しかしながら新地図は将来に渡り大きな成果として広く活用されることは間違いない。我々は古代マヤ文明を最も代表する遺跡であるティカルにおいて、今後も文化スポーツ省及びティカル国立公園の技術部門との協力関係の下で継続的に測量調査を続け、その成果を用いた各種の研究発表を通して各国・各機関・各プロジェクトとの連携を図り、ティカル遺跡や日本の無償資金協力で建設されたティカル保存研究センターがマヤ文明研究を牽引する中心地、また研究センターの一つとなることを目指している。

14:40 - 15:00

「ニカラグア考古学近年の進展から」

長谷川悦夫（埼玉大学非常勤講師）

ニカラグア太平洋岸からコスタリカ北西部はニコヤ文化圏とも呼ばれ、メソアメリカの一部を構成する。2000年代以降、この地域での考古学調査の進展により、従来の土器編年の抱える問題が明らかになった。ニカラグア太平洋岸の、グラナダ県、リバス県の諸遺跡での発掘調査と放射性炭素

年代測定によって、今まで、スペイン人到来直前のオメテペ期(AD1350-1550)のものであるとされていた多くの代表的な土器型式が実際にはサポア期(AD800-1350)の年代を持つことが判明したのである。これに照らし合わせて、著者らがかつてニカラグア太平洋岸マナグアで行ったティコモ遺跡などの発掘調査結果を見直してみると、やはりオメテペ期の土器が極端に少なくなってしまう。ニコヤ文化圏の土器編年のスペイン人到来直前の時期に空白ができかねない事態であり、これは、いつ、どのようにしてニカラグア太平洋岸やコスタリカ北西部がメソアメリカ化したのかという文化史とも密接に関連する。この問題を解決するには、当該地域での厳密な層位的発掘と年代測定の積み上げによる一層の土器編年の精緻化が必要である。その上で、最近マナグア市で行われた発掘調査に着目すると、厳密な分層発掘によれば、やはり最終居住段階でのみ出土する(つまり、真にスペイン人到来直前の年代を持つ)土器型式として、カスティーヨ刻文土器(Castillo Engraved)とラゴ黒色彫刻土器(Lago Black Modelled)が浮かび上がった。これらの土器を正確に定義して、その年代が「真に」オメテペ期(AD1350-1550)であることが確認できれば、土器編年の問題に解決の糸口が見つかる。また、チョロテガやニカラオといったエスノヒストリーや言語学が指し示すメソアメリカ集団の移住の過程とその様態について再考する手がかりにもなるだろう。

研究発表 (15:15 - 16:45)

15:15 - 15:45

「インカ帝国における食性の地域差 —炭素・窒素同位体比を用いた研究—」

瀧上舞（山形大学、日本学術振興会 PD）

ソニア・ギレン（セントロマルキ研究所）

渡部森哉（南山大学）

米田穰（東京大学総合研究博物館）

南米の広域を統治範囲に収めたインカ帝国ではトウモロコシが重要視され、その栽培と流通が促

進された。インカの統治によってトウモロコシ利用が増加したという研究は、ハウハ地域の報告がよく知られている。また各地で耕作されたトウモロコシは活発な資源流通によって帝国各地に拡散されたと考えられている。インカ帝国内でのトウモロコシ摂取の増加は、ハウハ地域から出土した古人骨の炭素・窒素同位体比分析でも支持されている。しかしながら、一方で、トウモロコシ摂取はごく僅かで、祭祀の際に用いる程度だったという見解もある。また、インカ帝国繁栄の短さや多民族・多文化な国家であったことから、帝国内でトウモロコシを利用しなかった人々がいる可能性も否定できない。このように一見矛盾するような2つの報告があることから、トウモロコシの摂取量は具体的にどのくらいで、帝国内で普遍的だったのかどうか、またインカによる影響がどのくらいあったのかという問題が提起される。この問題を明らかにするためにはトウモロコシの定量的な評価が必要になるが、同位体分析の報告が少ないことと、同位体分析ではC4植物利用の地域差に注目した議論が行われていないことから、この問題に対する明確な答えは示されずにきた。そこで本研究では、インカ帝国内の広範囲にわたる遺跡から出土した個人骨の同位体比分析を行うことで、食性の地域差やインカによる影響についての検証を行った。

本研究では、ペルー北部から南部までの10遺跡から出土した169点の古人骨の炭素・窒素安定同位体比分析を行った。またこれらの試料で¹⁴C年代測定を行い、15世紀～16世紀前半だと確認された61点の試料を用いて食性推定を行った。

インカ期の食性は全体としてはマメ類とC3植物、C4植物の混合食性だと考えられるが、遺跡によってC4植物の摂取量が異なっていた。特に、クスコ周辺とタンタリカ遺跡では高いC4植物の摂取量を示した。南部高地のモリノチラカチ遺跡はC3植物に強く依存し、C4植物摂取量が極めて低い食性を示しており、現代のアンデス中南部高地の根栽農耕文化の報告と一致する食性だと考えられる。また、北部高地のチャチャボヤス文化に属するコンドル湖遺跡ではC4植物の摂取量が低かったが、食性の時代差に注目したところ、インカの征服前後で炭素同位体比の上昇が見られた。これは、先行研究のハウハ地域の同位体比で見ら

れたインカの征服によるC4植物摂取量の増加が他地域でも起きていたことを示している。広域での食性の時代変化を調べてみると、11世紀～14世紀に食性の地域差が確立されている。15世紀～16世紀前半には、インカ征服後の食性変化が一部の地域で生じているが、食性の地域差が強く残っており、前時代に確立された食性の傾向を維持していたことがわかった。また、先行研究で報告されていたインカ時代の子どものミイラの食性変化から、子どもたちが元々異なる地域で生活しており、亡くなる1年前にクスコ周辺の食性に近づいた可能性を示すことができた。

15 : 45 - 16 : 15

「先スペイン期ペルー北部高地におけるラクダ科飼養の開始と変遷—動物考古学的アプローチから—」

清家大樹(筑波大学大学院、聖マリアンナ医科大学)
鵜澤和宏(東亜大学)
関雄二(国立民族学博物館)
井口欣也(埼玉大学)
渡部森哉(南山大学)

アンデス地域には、南北に非常に長い範囲に急勾配な山々が連なるアンデス山脈が存在し、海岸と山地の間には非常に多様な生態環境が比較的狭い範囲に分布する。そうした環境において、それぞれに分散する資源を統合し、一つの世帯もしくは社会で共有し利用する形態がとられていることが、植民地期の記録や現代の民族誌により知られている。それが「垂直統御」と呼ばれる資源管理のモデルである。こうした環境利用の中で、アンデス山脈に分布し高度適応をした南米ラクダ科動物はどのような役割を担ってきたのだろうか。

南米ラクダ科動物は、アンデス山脈に分布する高度適応をした大型偶蹄類である。アンデス地域において最優先種であり、狩猟採集から国家形成までの長い過程の中で、重要な貢献をしてきた。特に、紀元前4000年頃にアンデス地域で家畜化されてからは、ラクダ科動物は運搬、労働力、毛や肉の供給源、また、祭祀などに用いられ、その後のアンデス地域の諸社会にとって極めて重要な貢献をした。ただし、その利用法などの意味合いは社会ごとに変化していったことが予想される。

また、現時点でのラクダ科家畜の研究はその関心が系統、起源、拡散の方に重きが置かれており、植民地直後もしくは現代へと繋がる過程においての家畜利用の実態に関する研究は殆どなされていないのが現状である。

社会モデルとしての垂直統御モデルと初期家畜化モデルとの不整合性を埋め、両モデルの融合を図る為に、本研究では考古学データを用いた。南米ラクダ科動物と人間の関係との変化（即ちラクダの利用法、重要性）は、遺跡出土動物骨資料の特徴の変化にも痕跡を残していると考えられるからである。本研究では、考古動物相の復元、骨格部位出現頻度、年齢構成、計測値の4つの方法論に基づいて分析を行った。これらの分析、比較を通じて、以下のことについて明らかにすることを試みた。

- ① アンデスにおける社会変化
- ② ヒトと動物との関わりの変化により動物がどのように改変されるかを記載すること
- ③ ヒトと動物との改変のフィードバックの関係を解明すること

本研究で扱った資料は、ペルー北部高地の家畜化以降の時期である形成期からワリ期、そして植民地期の直前のインカ期の遺跡から出土した動物骨である。対象となる遺跡は、形成期はクントゥル・ワシ遺跡とパコパンパ遺跡、ワリ期はバーニョス・デル・インカ遺跡、エル・パラシオ遺跡、パレドネス遺跡、インカ期はサンタ・デリア遺跡、タンタリカ遺跡である。それぞれの時期は社会的状況も考古資料が出土するコンテキストも異なるが、ラクダ科家畜の利用という意味では変わらない。また、ペルー北部高地はラクダ科野生種の自然分布域外であり、遺跡出土ラクダ科動物骨は全て家畜であると想定が可能である。

本研究においては形成期からインカ期の間の時期のラクダ科家畜の利用について記述を行い、家畜化からどのように利用法が変化したのか、また植民地期の歴史民族学的研究や現代のラクダ科家畜をめぐる民族学研究による垂直統御モデルが何処まで遡ることが出来るのかを検討した。

16 : 15 - 16 : 45

「マヤ文明の起源、盛衰と環境変動：グアテマラ共和国セイバル遺跡と周辺地域の環境文明史」

青山和夫（茨城大学）
米延仁志（鳴門教育大学）
猪俣健（アリゾナ大学）
山田和芳（早稲田大学）
那須浩郎（総合研究大学院大学）
藤木利之（福岡大学）
篠塚良嗣（北海道大学）
五反田克也（千葉商科大学）
星野安治（奈良文化財研究所）

本研究発表では、マヤ文明の起源、盛衰と環境変動の因果関係を検証するために、グアテマラ共和国ペテン県南西部に立地するマヤ低地南部のセイバル遺跡と周辺地域における考古学調査と古環境調査の成果について論じた。セイバル遺跡の層位的な発掘調査によって、自然の地盤の上に前1000年頃に建造された公共広場と、その東と西に面する土製の公共祭祀建築の基壇が出土した。これは、マヤ低地で最古の「Eグループ」であり、この成果を米国の科学誌 *Science* に発表した (Inomata et al. 2013)。公共広場の東と西に面する公共祭祀建築の基壇は増改築され続け、前9世紀に西側の基壇は神殿ピラミッドを構成した。

神殿ピラミッドは、後に人工の神聖な山を象徴した。多くの人を動員して神殿を増改築してさらに大きな神聖な山を築き、権力を強化したのである。前8世紀には東側の基壇の長さは50mを超え、石造の階段が設けられた。セイバル最大の神殿ピラミッドを頂く「大基壇」の発掘調査によって、先古典期中期の前半（前1000～前700年）に建造された幅が34mを超える大きな基壇が検出された。初期の建設活動は、従来考えられていたよりも盛んだったのである。

セイバルはその後も発展し続けるが、後5世紀半ばに一時的に衰退した。しかしセイバル王朝は、7世紀に再興し、9世紀にパシオン川流域で最大の都市として栄えた。発掘調査によって、10世紀に王宮が破壊され、火をかけられたことがわかった。しかも王宮を飾った漆喰彫刻の男性像の顔が、儀礼的に打ち首にされていた。王宮では、破壊儀礼が行われたのである。また「中央広場」に面する神殿ピラミッドでも、同様に破壊儀礼が執行されたことが判明した。セイバル王朝の最後は、暴力を伴ったのである。

青山が領域代表を務める科研費プロジェクト

「環太平洋の環境文明史」(平成 21～25 年度)の古環境調査によって、2010 年から 2012 年にかけて、セイバル遺跡が立地するグアテマラのペテン県南西部および比較のためにペテン県中央部の湖沼においてマヤ地域で初めて年縞を発見した。年縞とは、木の年輪と同様に、湖底に年に一つ形成される「土の年輪」である。年縞の分析から人類史に対応する精密な年代軸を提供すると共に、降水量の変動、森林環境の変化、農耕活動による環境破壊などの多様な環境変動を高精度に復元できる。

年縞の花粉分析の結果、先古典期中期(前 1000～前 400 年)から古典期終末期(後 830～1000 年)に農耕活動や都市化によって森林が破壊されていたことが明らかになった。マヤ文明が干ばつ

で衰退したという学説がある。年縞の化学分析によって、古典期終末期を含む 750 年から 1150 年にかけて、ペテン県中央部だけで明白な干ばつの証拠が見つかった。先古典期中期から先古典期後期にペテン県南西部で干ばつがあったのにもかかわらず、セイバルは発展し続けた。ところが、セイバルが一時的に衰退した 5 世紀と放棄された 10 世紀には、干ばつの明確な証拠がない。仮に小規模な干ばつがあったとしても、セイバル衰退の主要な要因ではなかった。文理融合の環境文明史の研究によって、セイバルは、人口過剰、環境破壊や戦争等によって 10 世紀に衰退したことが明らかになった。

事務局からのお知らせ

1. 研究懇談会の開催について

2014 年も学会主催の「研究懇談会」(東日本部会、西日本部会)を開催いたします。会員の研究発表と交流の場をあらたに設け、学会としての研究活動をさらに広く展開していくことが目的です。企画、日程等について決定しましたら、メールや学会ウェブサイトでご連絡いたしますので、どうかふるってご参加下さい。

2. 第 19 回研究大会・総会の開催について

昨年の総会でもお知らせしましたように、古代アメリカ学会第 19 回研究大会・総会を 2014 年 12 月 6 日(土)、7 日(日)に名古屋大学(愛知県名古屋市)において開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

3. 原稿募集

①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第 17 号(2014 年 12 月刊行予定)に掲載する原稿を募集しています。投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定・執筆細目(第 15 号以降に掲載の最新のものを)をよくお読みの上、投稿をお願いします。

「論文」のほか「調査研究速報」にも奮ってご投稿ください。「調査研究速報」では、発掘などフ

ィールドワークの成果はもちろんのこと、文献調査やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。「論文」・「調査速報」・「書評」のいずれも随時募集しています。「論文」は査読(通常、原稿受領後 1～2 か月で査読終了予定)を終えたものから随時掲載が決まります。「調査研究速報」は 9 月 25 日までに届いたものを第 17 号の査読対象とします。

いずれの場合も、投稿希望者は下記編集委員宛てに事前にご連絡願います。投稿カードを配布しますので、これを提出原稿に添付してください。

お問い合わせ先:

井上幸孝(運営委員、会誌編集担当)

〒214-8580 川崎市多摩区東三田 2-1-1

専修大学文学部

Tel.

Fax.

E-mail

②会報「36 号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、特に若い会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力お願いいたします。

◎内容

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。
会誌『古代アメリカ』には投稿しないような**簡易の情報も可**。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員にとって有益な学術情報。

◎形式

○原稿字数は、写真・図版を含めて 4000 字（会報 2 ページ分）以内とします。

○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

◎掲載

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をする場合があります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

◎投稿先・締切

○運営委員（会報）福原弘識宛に、添付ファイルの形でメールにて送信してください。

送付先アドレス 
(会誌とは異なるのでご注意ください)

○投稿締切 5月16日(木)

○発行予定 6月下旬

4. 会費納入のお願い

会費が未納となっている方は、先にお送りいた

しました振込用紙を使用してお振込みいただくか、または以下の口座に直接お振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されています。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお2年度分以上、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行 口座番号：00180-1-358812
加入者名：古代アメリカ学会
三菱東京 UFJ 銀行本厚木支店
口座番号：1761650(普)
口座名義：古代アメリカ学会

5. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを1冊2,000円（会員価格）で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ研究会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第3号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

(事務局からのお願い)

現在、古代アメリカ学会では、学会とかかわる諸情報の連絡、および周知にメールを多用しております。まだ学会にメールアドレスを登録されていない方や、学会からメール連絡が届いていないという方がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いします。特に Gmail などのフリーメールをご利用の方は、事務局からのメールが迷惑メールとして処理されないよう、学会事務局アドレスを登録するか、迷惑メール対象から解除する手続きを行ってください。

<編集後記>

新年あけましておめでとうございます。昨年は今号の編集も含め、多くの方々のご協力をいただきました。本当にありがとうございました。

今号では、政治的状况から調査が難しく、光が当てられることの少なかった地域に関する寄稿・投稿をいただきました。市川会員のエルサルバドルで開催された考古学大会の報告記事では、多様な視点からの発表を通してこの地域の新しい息吹を感じました。南会員の投稿記事からは、考古学と地域活性化・博物館学といった、考古学が果たす現代的な役割を再認識しました。長谷川会員には、現在のホンジュラスからコスタリカに至る食の違いを、先史時代や植民地期に遡った考察を交えながらわかりやすくまとめていただきました。大平会員の投稿は、共通の儀礼テーマでのコンドルとクリキングの変換という、文化人類学的にも興味深い内容でした。皆様には、この地域での調査の進展や、文化のにおいを感じられるような文章を、現地の貴重な体験から綴っていただきました。ありがとうございました。

また、学会協力事業や懇談会といった、学会の充実を実感していただけるような記事も掲載することができました。山本会員には 11 月に開催されたチャビン研究のシンポジウムの内容を、背景も含めて簡潔にまとめていただきました。芝田会員の懇談会の報告からは、当日の活気が伝わってきました。

今年も、会報の内容充実に向け一層取り組んで参りますので、皆様のご協力をお願い致します。多くの方からの投稿をお待ちしております。

(中川)

新年あけましておめでとうございます。本学会の年度も 1 月に新年度を迎え、本年度は役員選挙となります。会員名簿作成も間もなくとなりますので、会員の皆様のご協力をよろしくお願いたします。

昨年行われた第 18 回研究大会は、これまで以上に多数の研究が披露され、非常に充実したものとなりました。本年度は名古屋大学で研究大会が行われます。二日間の日程で行われますので、学生会員も含めて積極的に発表をよろしくお願いたします。

新しい会報が出来上がりました。皆様のご協力により内容が盛りだくさんの会報となりました。記事を寄せていただいた会員の皆様には、年末のあわただしい時期にもかかわらず、校正作業にお付き合いいただきました。この欄を借りて御礼申し上げます。

これからも本会報と会誌、研究大会が会員の研究と情報交換の場として活用されるよう、皆様からの投稿をお待ちいたします。特に、個人で調査・研究をされている会員や、考古学以外を専門分野とする会員の方々に様々な場で貢献していただくことにより、より多彩で充実した学会運営が行われております。引き続き、皆様のご協力をよろしくお願申し上げます。

(福原)

発行 古代アメリカ学会
発行日 2014 年 1 月 15 日
編集 古代アメリカ学会 会報担当：福原 弘識
中川 渚
古代アメリカ学会事務局
〒338-8570
埼玉県さいたま市桜区下大久保 255
埼玉大学教養学部
E-mail : jssaa@sa.rwx.jp
ホームページ URL http://jssaa.rwx.jp/